

北海道大学総合博物館

ボランティア・ニュース

No.15
2009.12

特集・博物館訪問

札幌市内の博物館

札幌市内で、一口に「博物館」と言われているものには、どんな種類の施設が、幾つぐらいあるのでしょうか？

「博物館」といわれているものには、それぞれ定義があるのかも知れませんが、いわゆる博物館、資料館、郷土館、美術館なども、一般的には含まれているようです。

最近、札幌大学で制作した「ミュージアムMAP」という、札幌市内の「博物館」を紹介したパンフレットがあります。これは、北大博物館にも配布され、受付に置かれていたので、目にした人も多いかと思えます。

B4判紙を4つ折りしたカラー写真入りのパンフレットで、「博物館、資料館、郷土館、美術館」の副題がついており、文字通り、札幌市内のそれらの代表的な28の施設を紹介しています。各施設の写真と簡単な展示内容紹介、開館時間、利用料金、交通手段などの情報が盛り込まれており、手頃で親切・便利な案内パンフレットになっています。28施設の中で意外性のあるもの、ユニークなものとして「北海道立文学館」、「円山動物園」、「豊平川さけ科学館」、「ウインタースポーツミュージアム」、「雪まつり資料館」などがあります。パンフレット裏面には、札幌市のエリア別の略図が描かれており、紹介した28施設の位置を示しています。また、この裏面には「学校博物館」のタイトルで、市内の40の小中学校内にある、多くは「郷土資料室」的なものようですが、学校施設名、所在地、展示内容などを一覧表にまとめて掲載しています。



札幌大学制作
「ミュージアムMAP」
(部分)

一方、インターネットによって札幌市のホームペー

化石・地学ボランティア 安田 正

ジにアクセスし、「文化施設・博物館など」のページをみると、ここでは37の施設を紹介し、各施設の詳細な案内ページにリンクしています。ここで紹介している37施設のうち、上記の「ミュージアムMAP」の施設と同じものは14で、残りの23施設は、この紹介欄独自のものとなっています。ここでの紹介施設で目を引くものとしては、「雪印乳業資料館」、「白い恋人パーク」などの企業資料館のほか「旧永山武四郎邸」、「旧バチエラー邸」など、いくつかの建築文化財の紹介が多いのが特徴です。

札幌市には「博物館活動センター」といわれる機関施設があります。これは札幌市の自然総合博物館の建設構想を推進する機関施設の様ですが、すでにある程度の収蔵品を展示公開しているようで、「ミュージアムMAP」には、一施設として紹介されています。この「活動センター」のホームページには「市内博物館リンク集」があり、文字通り、それぞれの「市内博物館」のホームページにリンクしています。ここでは「市内博物館」として28の施設と、「各地域郷土資料館」として、おもに区単位で運営していると思われる8つの郷土資料館を紹介しています。この「市内博物館」28施設のうち、「ミュージアムMAP」の施設と同じものは14です。残りは14ですが、札幌市の「文化施設・博物館など」の残り37と一致するものは多くありません。また、ここでは「百合ヶ原緑のセンター」、「豊平公園緑のセンター」、「平岡樹芸センター」など、公園施設の紹介が多いのが特徴です。

さらに、上記のどこにも紹介されていない施設でも、小規模ながら、比較的充実した展示内容が評判の博物館、資料館がいくつかあり、しばしば私たちの話題に上がるものがあります。

少し説明が複雑になりましたが、このように見ると、札幌市内には、「学校博物館」といわれるものを除いても、資料館、郷土館、美術館、建築文化財、公園といったものを含む、一口に「博物館」といわれる文化見学施設が50から60は存在することになります。さあ、あなたは、今までいくつの施設を見学しましたか？これから行ってみたいと思うのはどこですか？

わくわくボランティアの会

室蘭市民俗資料館と白鳥大橋観光の旅（平成 21 年 9 月 13 日、室蘭市）

「第 2 回博物館におしかけよう会」として、鳩山首相のお膝元室蘭市の民俗資料館(陣屋町)を見学しました。小規模ながら相当施設認可館で、地の利と館機能を極限まで活用した運営で道南のモデル博物館になっています。



博物館裏に接する南部陣屋跡に勢揃いした善男善女達

国指定史跡の東蝦夷地南部藩モロラン陣屋跡に隣接して 1980 年(昭和 55 年)開館した郷土の歴史を展望する教育施設で、市教育委員会が所管しています。鉄筋二階建て総面積 977 平方メートル本館に木造平屋の体験学習棟が付随し、明治以来の地域を支えた産業と暮らしの民具類約 3 万点が収蔵、展示されています。陳列を兼ねた収蔵庫が公開され、分類整理されてよく手入れされた生活生産道具がぎっしりと並び、見る者を圧倒します。スタジオ風展示室(2 階)

野外博物館・北海道開拓の村訪問記

第 2 回博物館におしかけよう会(9 月 13 日、室蘭市立民俗資料館および東蝦夷地南部藩陣屋跡)に引き続き、10 月 25 日(日)に第 3 回として晩秋の野外博物館北海道開拓の村を訪れました。

村の広い駐車場から両脇のツツジがきれいに紅葉している広い石階段を上がると、懐かしい旧札幌停車場があり、その奥の開拓使庁舎の正面ドーム屋根に北辰旗が翻っていた。記憶にある札幌停車場はもっと

図書ボランティア 久末進一

は 6 台の稼働ブース展示台が配置されています。実物ならではの質感が直接伝わる露出史料と、背面写真、解説によるダブルアレンジメント構成で考古、アイヌ、開拓、産業へ、港と共に歩んだ鉄の街室蘭を紹介しています。目玉は絵鞆遺跡、その他の出土の恵山式土器・石器群、海のアイヌ資料、土族移住と輪西屯田兵遺品、港湾荷役、製鉄資料、そして艦砲被災の戦時資料と珍しいものが盛りだくさんです。

石油ショック当時、設計を半分に削って実現した施設とあって、文化財保存と公開の対立概念を、展示室と収蔵庫の多機能性発揮で解決し、圧縮された館の本来活動を維持しています。博物館内は空間を有効に活用する工夫と苦心が見られ、階段下にまでライブラリー文庫があります。

南部藩(盛岡市)が安政年間に設け、北辺警護の武士団が駐留した土塁式陣屋跡は、歴史公園で平面復元され、方型二重土塁と大杉林、藩士の墓が往時をしのばせます。港侵入の異国船を大砲で撃退する出張り砦で、新渡戸稲造の父十次郎が設計したものです。

函館戦争時は榎本軍も駐留しました。町名にもなった旧蹟地と室蘭港を結ぶ新名所「白鳥大橋」(橋長 1380m、塔高 139.5m)がこの地から海をまたぎ、記念館「みたら」(道の駅)と室蘭水族館、周辺の名所「屋台村」と臨海公園、ヨットハーバー等、観光スポットへアクセスします。特に東日本最大の吊橋からは噴火湾と白鳥湾(室蘭港)が一望でき、その雄大な景観は息をのむ美しさです。名物室蘭のヤキトリやホタテの玉焼きの美味と共に、忘れえぬ素晴らしい思い出となりました。

地学ボランティア 在田一則

大きかったと思ったが、2/3 ほどに縮小して再現してあるらしい。ここが村の正門入り口である。間違えて国道 12 号の「開拓の村入り口」でバスを降りてしまい、場所がわからずタクシーで駆けつけた人もいたが、10 時 15 分過ぎには今回の参加者 7 名が駐車場の待合室に集合した。

最初に財団法人北海道開拓の村事業課長の中島宏一さんの歓迎挨拶と開拓の村の紹介があった。こ

の村は明治から昭和初期に建築された北海道各地の歴史的建造物を移築復元・再現し、開拓期以来の北海道の建築物とそれにもなう生活文化を保存し、道民に体感的に理解してもらうことを目的として 1983 年に北海道により設置されました。現在は財団法人北海道開拓の村が指定管理者となって運営している。ボランティアの会会長佐藤 昴さんから開拓の村ボランティアの会の仕事・組織・運営方法などについて説明していただきました。今年度の登録者数は 211 名で、曜日ごとにグループを作り、毎日 16-18 名のボランティアの皆さんが解説案内(総合案内・村内ガイドツアー・建物内常駐解説)や日替わりの演示(わらじ作り・漁網繕いなど)を行うほか、村のいろいろな年中行事や体験事業などに協力しているということでした。ボランティアの皆さんの活発な活動ぶりは、昨年 10 月に村内の小樽の網元であった旧青山家の鯨御殿を舞台にボランティアによる演出・出演で行われた芝居「漁場の一年」にも表れています。なお、開拓の村のボラ

ンティアになるには、ボランティアの会に登録しなければならないということでした。

11 時過ぎからは、日曜日の村内ガイドツアー担当のおひとりである宇野さんに村内を案内していただきました。村は 54ha の広大な野幌の森のなかに、入り口近くに散在する市街地群のほか、漁村群・山村群・農村群に分散して展示されており、すべて見るには 1 日でも足りなさそうです。今回は、あいにくの冷たい風のなかを、市街地展示の一部を中心に懇切な説明で案内していただきました。一般見学者は見るできないところも見せていただいた。それぞれの建物は、時代を経てきたせいもあるだろうが、現在の特徴のない建物とは違い、米国開拓期様式の建築や和洋折衷の建物は風格があり、それぞれが自己主張しているようにした。私が小学校の頃に切れないバリカンで散髪してもらった「山本理髪店」もありました。12 時 30 分から村内の食堂で一同で昼食をとり、解散しました。

琵琶湖博物館訪問記

日本第四紀学会の 2009 年総会が 8 月末に琵琶湖博物館で開催され、参加しました。

初めて神戸空港を利用し 2 階からポートライナーを利用して乗り換えて昼過ぎには草津に到着し、久しぶりの琵琶湖博物館訪問となりました。鳴いている蝉はツクツクボウシだそうで、やはり関西は札幌とは環境に大きな開きを感じました。

出発前に、博物館に電話で確かめたところ、ボランティアの会は無いらしいとのことでした。

私が興味をもっていた学会のポスターを眺めているその時、ポスターの管理のために座っていた女性が黒須さんでした。この方は、「小林快次先生のファンです！」とあって北大博物館に興味を示されました。私は琵琶湖博物館にはボランティアの会は無いらしいとすねと話し掛けてみました。しかし、ボランティアの会にかわる「はしかけ」という名前の会があるということでした。博物館には、スタッフの皆さんが一般市民が研究者になっていけるように支援する組織があり、その支援スタッフの一人が黒須さんだったのです。登録料は 300 円/年だそうです。地域との結びつきを強くし

植物・図書ボランティア 星野フサ

て、いろいろの事柄にかかわってゆこうという事で「はしかけ」という名の沢山のグループがあるそうです。

草津で琵琶湖博物館を訪問中にスタッフの黒須さん、里口さん、高橋先生に直接お話を伺った時のメモからこの訪問記を書きました。

化石などを扱う会には「もぐらの会」というのがあって化石を持ち込んで展示にかかわりその人が説明をするというグループがあるそうです。「ほねほねクラブ」というものもあるそうです。「単細胞グループ」は珪藻の論文投稿をしているそうです。「魚の会」は滋賀県のお魚の分布を調べ外部で発表したりしているそうです。生き物系がおおいそうです。はしかけ制度に登録してもらい、そして勉強してもらう。1 年更新でボランティア保険に入る。ゆるい縛りでやっているようです。登録した市民がお勉強したいことを学芸員がお手伝いするというこのようです。博物館で自分のやりたい事をやる関係から交通費は出さないそうです。グループが育ち、ほぼ独立しているところもあり、100 人をこえる登録があるそうです。

特別寄稿 **ネスパ?の長尾先生(その3 / 4)**

北大教授に就任された長尾先生は、はじめは日本各地の中・新生代化石を研究されました。貝化石の他に、アンモナイトの顎器や、十脚類の甲殻類も記載さ

北大名誉教授・総合博物館資料部研究員 加藤 誠

れました。そして、道内各地を広く踏査されました。後に長尾先生の助手となった故湊 正雄先生から聞いたところでは、長尾先生について角田以外の全炭鉱

に入られたそうです。その中で、北大理学部地鉱の第1回の卒業生、大立目謙一郎、斉藤林次氏を指導され、石狩炭田のクリッペの存在と、それを生じさせた構造運動を明らかにされたのでした。大立目さんは秋田大に、斉藤さんは、のち熊本大に行かれました。長尾先生は、大立目さんに、人間は一芸に通ずることが肝要で、多芸は良くないと仰ったそうです。しかし、そうも言ってはおられなくなりました。ある時、先生のもとにカラフト(サハリン)産の大きな化石が持ち込まれました。調べてみると、これは、アメリカ原産のデスモスチルスという哺乳動物の頭骨であると判明しました。しかも何と、カラフトの現地には、さらに胴体部分の骨化石が残っている模様なのです。デスモスチルスは特異な臼歯で知られた化石で、頭骨や、その他の体部分は、それまで知られていなかったものですから、長尾先生はとても興奮なさったことでしょう。直ちに費用を調達して、助教授の大石三郎先生を同道、カラフトの気屯に発掘に赴かれることになりました。これには、当時東北大の学生だった橋本 亘氏も同行し、彼の撮影したムービーフィルムが今も残っています。化石は、初雪沢という所に設けられた、木材流送用の木造ダムの上流の大きなノジュール(団塊)の中に取り出されました。前年の出水で、ノジュールの位置が動いていて、なかなか見つからなかったそうですが、調査・発掘予定時期の終わり近くに幸運にも探し当てることが出来ました。巨大な岩塊を川から引き上げるにはウインチを用い、大変な作業だったようです。化石を含む岩塊は、無事北大まで搬送され、長尾先生は、石工さん(工藤さん?)の助力のもと、化石骨を、岩塊から取り出すことが出来ました。骨は、期待通り、細部にわたるまで保存されており、それまでは無脊椎動物化石しか取り扱ったことのなかった長尾先生は、ついに脊椎動物化石の研究にとりかかることになったのでした。

取り出された骨格は、口吻の部分に若干の欠損がある以外は殆ど完全に揃っており、折り曲げた鉄製の支柱の上に並べられ、全体として一見カバのような姿で復元されました。復元には、北大近くの標本商、信田さんと相談されながらあたられたということです。熊

野純男さん(元理学部講師)が、若い頃、汗水をたらしながら鉄骨の間をかいぐって復元の手伝いをされたのでした。ここまでの作業は、大急ぎでなされ、陸軍の大演習の際、北大に行幸された昭和天皇にご進講という運びになったことは前述のとおりです。がっちりとした四足を踏ん張り、胸板をもった骨格で、デスモスチルス・ミラピリスと命名されました。ミラピリスは素晴らしいといった意味で、パリで長尾先生に案内された原田準平先生は、デスモスチルス・ミラピリクス(見りゃびっくりす)とあだ名しました。この復元骨格は、地質学鉱物学科の看板となって、長く標本室の中央に置かれていました。



デスモスチルスの化石骨格標本
(北大総合博物館)

ただ長尾先生自身は、デスモスチルスの研究を完成するまでには至らず終わりました。戦後、学士院会員の矢部長克先生(長尾先生の先生)を長とするデスモスチルス研究委員会が発足し、頭骨については、井尻正二・亀井節夫両氏によって、体躯の部分の記載は鹿間時夫・高井冬二両氏らによって研究され、論文が発表されています。全体の復元についてはその後も、亀井氏、犬塚則久氏らによって研究が続けられました。

----- つづく -----

事務局からのお知らせ

- * 11月10日 ボランティア室に電話が設置されました。
番号は011-706-4706 ダイヤルインです。
- * 12月11日 忘年会
図書ボランティア 八木田道敏さん提供の談話会(16:00~)に引き続き行います。会費 2,000 円。
- * ボランティア・ニュースは博物館のホームページからもご覧になれます。<http://www.museum.hokudai.ac>

ボランティア・ニュース

編集・発行
北海道大学総合博物館ボランティアの会
(担当者:星野、沼田、安田、永山)
発行日:2009年12月1日
連絡先
〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目
Tel: 011-706-4706